

日本大学文理学部

史学科同窓会

會報

第二号 (通号七九)

平成二十九年三月二二日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二―二五十四〇

日本大学文理学部史学研究室内

TEL〇三三五三二七一九七〇三

史学科左見右見

〈文理学部史学科も還暦！〉

学科主任 浜田晋介 (昭和五六年度卒)

史学科のある文理学部が、文学部そして法文学部から改組され、現在の桜上水に移ったのが昭和三三年です。来年この地で還暦を迎えることになります。その間キャンパスの建物や学生、史学科組織には幾多の変化があり、今も変貌を続けています。しかし、学窓を離れて一度も文理学部に足を運んでいないという方も多いことでしょうか。近年の文理学部や史学科の様子を、簡略に皆さまにお伝えしたいと思います。

まずは組織・カリキュラムから。史学科の教員は現在日本史四人、西洋史三人、東洋史三人、考古学二人、文化財学一人の一三人体制です。史学科事務室のスタッフも六人

健在です。史学科在籍数は現在一年生(新入生)が一五〇人前後の人数で推移して、三クラスに分かれています。私が入学中はこのクラス編成は、第二外国語によって振り分けられていましたが、現在第二外国語の選択は無くなっています。卒論を必修にしていることは、おそらく史学科創設以来のことだと思えますが、これは変化ありません。ただし、卒論作成のために三年生から卒論のテーマに合わせた先生方のゼミナールに属し、同じ先生のもとで二年間研鑽していく制度をとっています。

在学中に取得できる資格は、教職・司書に博物館職員の資格である学芸員が加わりました。学芸員課程の幹事学科は史学科で、史学科以外でも、哲学・国文・社会学・心理学・地理・地球などの複数学科から受講生がいて人気が高く、二年生終了時点で成績と面接で人数を制限しています。建物についてもこの一〇年ほどで大きく様変わりしました。

学芸員課程と密接な関わりを持つ文理学部資料館が、平成十八年度に東京都教育委員会指定の博物館相当施設として開館しています。その建物には地上二階・地下二階の図書館があり、以前あった図書館や地下の学食は今も平地になっています。学食は秋桜、チェリー、福松、スエヒロがあり、他に安価なお弁当も学生の間では人気です。一号館・旧三号館・本館などに囲まれていた小グラウンドで汗を

流した方も多いと思いますが、この場所は平成一九年に現三号館建設に伴って、旧図書館・旧三号館等とともに無くなってしまいました。史学科研究室は現在二号館（旧研究棟）八〇一〇階にあり、史学科独自の図書室をもっているのはそのままですが、それ以前に研究室があった本館は来年度には解体する予定です。それに代わり新たな本館が、今年三月に竣工します。こうして見ると一号館だけが変わらずにいて、文理学部の歴史をみているのがわかります。人や建物の新旧は入れ替わっていますが、史学科は現在でも文理学部で人気の高い学科として続いています。

毎年三月には史学科同窓会、一月にはホームカミングデー（文理学部校友会）が開催されています。同級生・先輩後輩とお誘いあわせの上、お出かけ下さい。お待ちしております。

史学科教員近況

〈白夜のペテルブルクにて〉

土屋 好古 史学科教授 近代ロシア史

二〇一六年六月一三日から七月四日の三週間、ロシアのペテルブルクに滞在して調査を行った。普段は校務の関係

でこのような気候の良い時期に、しかも三週間という比較的長い期間調査にでかけることは不可能で、ほとんどの場合、ロシアの図書館や文書館が閉館あるいは短縮開館になる七・八月の夏季スケジュールを終えて通常の業務に戻る九月に調査を行ってきたが、二〇一六年度はサバティカルを得たために、この時期での調査が可能になった。この時期の滞在は、留学中のまだかの地がソ連であった一九九〇年以來なので実に四半世紀ぶりのことであった。

周知のとおり、ロシアはクリミア問題のため制裁を受けているさなかのことであるが、街中を行きかう人々の表情には余裕があるように見受けられた。もともとこれは一年で最もよい季節のせいもあるかもしれない。寒く、日が短く、また十一月などは雨も多いこの地では、秋冬はどうしても人々の表情は硬くなりがちであるように思う。六月、七月は観光シーズンのピークでもあるので、外国人観光客だけでなく、ロシアの様々な地方から「おのぼりさん」がやってくる。ロシアは多民族国家なので、私のようなアジア人の顔立ちの人も多数住んでいる。以前はメガネや時計である程度見分けがついたが、今や外観だけでは外国人かどうか見分けがたくなっている。地方からの観光客は地理に不案内であるので道を尋ねたりするが、地元民がどうかなどはお構いなしで、私のようなアジア人の顔の者にも平

気で尋ねてくることになる。また、今回驚かされたのは、中国人観光客の多さであった。ペテルブルクのあと、フィンランドのヘルシンキに移動してさらに三週間調査を行ったが、移動日のペテルブルクの空港も中国人があふれかえっていた。

今回のロシアでの調査の主目的は、一九〇六年三月から四月初めにかけて実施された第一国会選挙における、ペテルブルク労働者の動向を探ることであった。首相ヴィツテの依頼によってドミトリエフ・マモノフが編纂した第一国会選挙に関連する膨大な新聞記事のクリッピング史料がターゲットである。この史料は、ロシア国民図書館手稿部に原本が、ロシア国立歴史文書館に控えが保存されていることがわかってはいるが、アクセスの利便性などを考えて、国民図書館での閲覧をまず申請した。幸い、閲覧が認められたので、同図書館の手稿部で調査した。三週間の滞在期間中、到着日、移動日、定期休館日（毎月最終火曜日）を除いて、土曜日・日曜日も史料の書き抜き作業を行った。手稿部での仕事は今回が初めてであったが、館員たちは皆親切で、気持ちよく仕事ができた。他方、並行して調査をした新聞部（手稿部のある本館から一〇分弱、フォンタンカ運河沿いにある）の館員は、かつてのソ連時代のまま、ぶっきらぼうで、笑顔もまったくみせない対応ぶりである。

同じ図書館の館員で、どうしてこのような態度の違いが生まれるのか不思議ではある。調査したのは、全一五冊の分厚いスクラップブックのうち、ペテルブルク市、ペテルブルク県を対象とした第一四冊、第七冊に加えて、比較対象のためモスクワ県・モスクワ市（第五冊）、ハリコフ県（第九冊）などの工業地域を含む諸県、および総括の第一五冊である。この調査で、ペテルブルクにおける労働者の選挙行動はほぼ全容が解明できる見通しがたった。休みなく仕事をしたので、さすがに疲れ、年齢を感じるようになったが、満足できる成果であった。

史学科の昔と今

〈恩師探訪〉

—— 昨年に続き「恩師探訪」のコーナーでは、日本中世史の分野で本学史学科で教鞭をとられた鈴木國弘先生にお話をうかがうことにしました。鈴木先生は一九五六年に入学、その後大学院に進まれ、文理学部助手を経て教授として長年ご勤務されました。早速ですが、入学当時の史学科の雰囲気などはいかがでしたか。

【鈴木】私が入学した一九五六年当時の史学科は、一学年三〇名程度のこぢんまりしたものでしたが、教授陣は、

石田幹之助・和田清・龍肅・山中謙二・鎌田重雄という、
そうそうたる方々でした。学生たちが当時盛んだった「騎
馬民族」説の研究会を開いたところ、突然教室に入ってきて来
られた石田先生が「私は騎馬民族説は嫌いです」といわれ
た途端、研究会が即座に解散してしまったところに、古き
良き（？）時代の学科の雰囲気伝わっています。

——なんとも勇ましいというか、ほほえましいエピソード
ですね。ところで先生が中世史を専攻されたきっかけな
ども伺えればと思います。

【鈴木】私は生来、奈良を唄った会津八一の歌集、和辻
哲郎や亀井勝一郎の随筆などが大好きでしたので、学生時
代から法隆寺の「夏期大学」講座に参加するなど、古代史
に興味をもっていました。講座参加は大抵は斎藤正明君と
一緒でしたが、後には笹原一晃君・土倉元子さん等も参加
し、坂本太郎・中村元・大岡実等の先生方や、当時の法隆
寺館長佐伯良謙といった方々の話を楽しみました。講座の
最終日には、史跡をバスで廻るエクスカアションがありま
したが、その折、バスガイドが「今日は七月二八日、大和
平野も、夏の盛りでございます」と云った明るい声が、今
も記憶に残っています。ですから、私が最初に分析した資
料は古代の『戸籍』であり、古代家族の行方を追いかけて

いるうちに、中世名主の家族に行き着き、中世史研究で領
主制論を研究されていた京都の戸田芳実さんなどと廻りあ
うことになったのです。

——なるほど。ところで『中世史研究』という雑誌がご
ざいます。これを作られた事情もふくめて、サークルとし
ての研究会活動などについてもお話しいただければと思い
ます。

【鈴木】中世史研究会では、毎年夏に伊賀国黒田庄・上
野国新田庄・高野山麓の莊園など、現地調査するのが慣例
でした。その調査結果の公表のために作成されたのが、『中
世史研究』です。最盛期には四十名ほどいた会員が、調査
の直前には連日の史料整理、幾つかのグループに分かれて
の調査事項の分担確認、多様な地図の調達、現地の「古老」
との連絡等、てんやわんやの騒ぎでした。黒田庄調査の時、
東北大学の人間田宣夫さんが合流、高野山麓調査時には、
同じく東北で豊田武先生の門下の方々の大石直正・田代脩・
山陰加春夫さんが参加しました。この陰には、恩師で日大
でも授業を担当されていた豊田武先生のお口添えもござい
ました。私にとっても後の大切な人脈になりました。

——そうだったのですね。現在も大学院で授業をお持ちですが、先生ご自身、昨今の研究はどんな方面に興味をお持ちなのでしょうか。

【鈴木】私も今年九月には、傘寿ですよ。他人事のように、ピンと来ません。精神的には、四五才くらいが妥当なところと思うのですが、体力的な衰えはやはり感じています。女房から「お酒と女性は、一合（号）までヨ」と釘を刺されていることも、原因の一つでしょう（笑）。それで仏心がついたのか、最近では「法然」を大学院の講義にとり上げ、私自身だけでなく講義参加の学生も一緒に「極楽」へつれていってあげようと、深い慈悲の心をそいでいます（笑）。学生は迷惑らしいですが、私も大分人間が出来てきたようです。

——いろいろ話題は尽きませんが、最後にご自身で座右にしている言葉があればお伺いできますでしょうか。

【鈴木】結構な座右の銘がある位なら、もつと立派な人間になっていたことでしょう。「若者よ、身体を鍛えておけ」という昔の歌を思い出し、自分も若者だとむりやり思い込み、どんな高いビルでも、エレベーターやエスカレーターを使わず、階段を一段一段登るのを日課としています。当然超高層ビルのある新宿副都心などには近づきませ

ん（笑）。

——謹厳で実直な鈴木先生の雰囲気は伝わる内容でしたが、そんな中にも興味深い、しかもウィットに富んだ語り口を聴かせて頂き、学問にも浮気がないストレートさが伝わって刺激になりました。本日はありがとうございました。

（質問者・文責 関 幸彦）

〈現役学生の声〉

日本史ゼミナール（上保國良先生・近世史）

博士前期課程一年 大西 真央

——上保先生のゼミの空気はどうですか？

【大西】上保先生のゼミは人数が多く、いろんな学生が集まっているので、楽しい雰囲気です。

特に卒論作成が本格化する四年生の時期などは、仲間が多くいる安心感も大きく、私が所属していた時も、それが心の支えになったのをよく覚えています。ゼミ生が多い分、みんなで乗り越えらるとか、支え合うといった感覚が強いのもかもしれません。

ちなみに、私は現在GSA（グラデュエイト・スチュー

デント・アシスタント」という形で上保先生のゼミのお手伝いをさせていただいてますが、今は私が学部生だった頃よりもさらに人数が増えていて、総勢八〇名以上のマンモスゼミとなっています。

——たしかに人数は多いみたいですね。その分の卒論その他の指導はどのようにしているのでしょうか。

【大西】ゼミでは一人一人が発表をするというより、毎回小テストを行うことで、卒論作成に必要な技術を身に付ける、というやり方が基本になっています。例えば、先行研究の読み方、史料の探し方、基本となる近世の知識を問う、といったような感じですよ。

もちろん、卒論の途中経過の発表を希望する学生もいるので、その場合は前もって先生にお話をして、ゼミの時間を使って発表させてもらうことになります。

それでも、やはりゼミ生全員の発表はなかなか厳しいものがあるので、三年生の時からレポートとして卒論の下書きを完成させる課題を出したり、かなり前もって各学生の作成段階等を把握し、指導ができるように、工夫なさっています。

——ちなみに、上保ゼミは先生ご自身がお酒を召し上がらないので、別名「スウィーツゼミ」といううわさもありません。その「スウィーツ」は、厳しさよりは和気藹々を大切に様子みたいですが、そのあたりはいかがですか。

【大西】たしかに、上保先生は甘いものが好きですね。ゼミ自体も和やかな空気で進んでいくので、そういう意味では「スウィーツゼミ」と言えるのかもしれませんが。

ただ、評価や指導は必ずしも「スウィーツ」というわけではないです。やるべきことをきちんとやっていないような場合には、「スウィーツ」どころか「辛口（大辛）」くらいなのではないかと…。

——大西さんは現在大学院生ですが、ご自身の進路を含め、ゼミ生たちはどんな就職口を希望していますか？もちろん、ザックリでかまいませんけれど。

【大西】私は、教員を目指して日々修行中です。ゼミ生の中にも、やはり教員を目指している学生はいますが、それだけでなく公務員や学芸員を目指している学生も多いように思います。

もちろん一般企業を希望している学生もいて、東京で就活をする学生、地元での就職を希望している学生など、人数も多い分様々です。

——最後に、上保先生ご自身の魅力はズバリどこですか？なんとなく、懐の深さ・広さあたりかなあと思ったりしますが。どうでしょうか。

【大西】私も、上保先生の懐の深さや広さは、大きな魅力だと思います。

上保先生が、人の努力や頑張りをきちんと認めて相応の評価をしてくださるのも、そういう懐の深さや広さあつてのことなのではないでしょうか。

あとは、物事の先の先まで見据えて行動し、しなやかながらも厳しく、正しいことには「正しい」、間違っていることには根拠や理由を明らかにして、ハッキリと「間違っている」という判断を下すことができるというところも、尊敬できる部分であり、上保先生の魅力・すごさのひとつといえるのではないかと思います。

(質問者・文責 関 幸彦)

近況通信

○気付けば女子校勤務も三〇年を越えました。自分には向いていないのでは？と悩みつつ先輩の先生方や生徒に教えられてきた年月だと実感するばかりです。ただ最近、保護者の意識の変化や少子化の影響に戸惑うことも多く、教

員としての苦勞の質が変化してきた事も実感します。自分の経験を若手に伝えるだけでは対応できない出来事が多くなってきました。このような変化に対応できる柔軟性を身に付けていかねばと思う今日この頃です。

昭和五四年度卒 森 高広

○都立高校の教員になって六年目になりました。私学の非常勤講師を一六年間やって、四〇代になって初めてやった担任は、なかなか疲勞度の大きい仕事でした。整体師に言わせると「体に力が入っている」からだとか。初任校で卒業生を出して、今は二校目、生徒の小さな頑張りを発見することも多く、私も頑張っている状況です。授業準備は後回しになっていますが、通勤電車の中で読書しながら学生時代の心を忘れないようにしています。

平成三年度卒 粕谷 玲

○私は日本大学文理学部史学科から同大学大学院で学ばせていただきました。現在は日本大学藤沢高等学校に務め、日本史を担当しています。恩師である上保先生には、現在でもお世話になっております。史学科の後輩が本校の専任

教諭や非常勤講師になることも多く、毎年のように教育実
習生がやってきます。改めて、日本大学のつながりは大き
く長いものだと感じます。これからも日本大学文理学部史
学科が発展していくことを祈念しています。

平成一六年度博士前期課程修了 佐藤 至亮



平成二八年度 日本大学文理学部史学科同窓会
二〇一六年三月五日 於：アルカディア市ヶ谷

平成二八年度史学科行事紹介

- 八月三一日 考古学ゼミナール合同合宿(九月二日まで)
大阪府・奈良県において、浜田ゼミと山本ゼミの合同合宿が行われ、一〇名の学生が参加しました。
- 四月 二日 ガイダンス開始(四月七日まで)
四月 二日 文理学部開講式
四月 八日 日本大学入学式(日本武道館)
四月 九日 前学期授業開始(七月二十八日まで)
七月二七日 文理学部夏季オープンキャンパス
史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほか、坂口明教授による特別授業「歴史を知る方法」を行いました。
- 八月 二日 考古学ゼミナール合同合宿(九月二日まで)
大阪府・奈良県において、浜田ゼミと山本ゼミの合同合宿が行われ、一〇名の学生が参加しました。
- 八月 二日 夏季休暇開始(九月二二日まで)
八月 一日 遺跡整備調査(一〇日まで)
長野県上川村国指定史跡大深山遺跡において、調査協力依頼により、整備調査が行われ、一二名の学生が参加しました。
- 九月 二日 後学期ガイダンス
九月 二三日 後学期授業開始(一月三〇日まで)
十一月 三日 文理学部ホームカミングデー
史学科では、学術研究発表会(史学部会)を開催しました。
- 八月 八日 東洋史ゼミナール合同合宿(一〇日まで)
日本大学文理学部山中湖ゼミナーハウスにおいて、加藤ゼミ、松重ゼミ、粕谷ゼミの合同合宿が行われ、一〇名の学生が参加しました。
- 九月 二二日 後学期ガイダンス
九月 二三日 後学期授業開始(一月三〇日まで)
十一月 三日 文理学部ホームカミングデー
史学科では、学術研究発表会(史学部会)を開催しました。
- 八月三〇日 日本史ゼミナール研修旅行(九月一日まで)
京都府において、関ゼミの研修旅行が行われ、四〇名の学生が参加しました。
- 一二月二六日 冬季休暇開始(一月九日まで)
一月二一日 卒業論文受付開始(一月一六日まで)

二月 七日 春季休暇開始 (三月三十一日まで)

卒業式 (日本武道館)

三月二十五日 文理学部学位記伝達式

理学部学位記伝達式

平成二八年度史学科非常勤講師数

六二名 (大学院を含む)

平成二八年度史学科開講科目数

総合教育科目 半期九コマ
学科専門科目 半期一七八コマ
教職課程 半期二コマ
学芸員課程 半期二〇コマ
通年二コマ (集中含)

平成二八年度史学科データ一覧

(二月一五日現在)

史学科専任教員

- 日本史 中村順昭教授 (日本古代史)
関 幸彦教授 (日本中世史)
上保 國良教授 (日本近世史)
古川隆久教授 (日本近現代史)
東洋史 加藤直人教授 (東・北・中央アジア史)
松重充浩教授 (東アジア近現代史)
粕谷 元教授 (トルコ近現代史)
西洋史 坂口 明教授 (古代ローマ史)
土屋好古教授 (近代ロシア史)
森ありさ教授 (アイルランド近現代史)
考古学 浜田晋介教授 (日本考古学)
山本孝文教授 (東アジア考古学)
文化財学 大塚英明教授 (文化財学)
- 史学科研究室スタッフ
堀川 徹助手A (日本古代史)
山本興一郎助手 (古代ローマ史)
天野 頌子助手B・市川 光祐 副手
小島 りら 副手・辻 あや子 副手

平成二八年度史学科開講科目一覧

- 自主創造の基礎一 (旧歴史学入門ゼミナール) 史学概論
- 自主創造の基礎二 (旧史学概論一)
- 日本史入門
- 東洋史入門
- 西洋史入門
- 考古学入門
- 日本史概説一・二
- 東洋史概説一・二
- 西洋史概説一・二
- 日本考古学概説一・二
- 外国考古学概説一・二
- 日本史基礎実習一・二
- 東洋史基礎実習一・二
- 西洋史基礎実習一・二
- 考古学基礎実習一・二
- 日本史研究実習一・二
- 東洋史研究実習一・二
- 西洋史研究実習一・二

- 考古学研究実習一・二
- 日本史ゼミナール一・二・三・四
- 東洋史ゼミナール一・二・三・四
- 西洋史ゼミナール一・二・三・四
- 考古学ゼミナール一・二・三・四
- 文化財学ゼミナール一・二・三・四
- 日本史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 東洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 西洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八
- 考古学特講一・二・三・四・五・六・七・八

- 日本史料研究一・二・三・四
- 古文書・古記録学一・二・三・四
- 東洋史料研究一・二
- 西洋史料研究三・四
- 西洋文献研究三・四・七・八
- 考古学方法論一・二・三・四
- 考古学実地研究一・二
- 遺跡解題一・二
- 歴史民俗学一・二
- 文化財学一・二

平成二八年度史学科学生在籍者数

- 学部生 一年生 一七一名、二年生 一四八名、三年生 一四九名、四年生 一五五名
- 合計 六二三名
- 大学院生 (M) 一年生 八名、二年生 一一名
- 合計 一九名
- 大学院生 (D) 一年生 一名、二年生 一名
- 合計 二名

日本大学文理学部史学科同窓会会則

平成二七年三月七日制定
平成二八年三月五日改定

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、日本大学文理学部史学科同窓会と称する。

(成員)

第2条 本会は、日本大学文理学部史学科を卒業した者および日本大学大学院文学研究科史学専攻・日本史専攻・外国史専攻を修了した者（満期退学を含む）等ならびに史学科教職員を経験した者をもって組織する。

(目的)

第3条 本会は、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、第3条の目的を達成するために、次の事業を行う。

① 総会および懇親会の開催

② その他目的達成のために必要な事業

(会計)

第5条 本会の会計は会費をもってこれをまかない、会計年度は1箇年とする。期間は1月1日から12月31日までとする。

(会費)

第6条 本会の会費は終身会費5千円とし、入会時に納入するものとする。

(その他)

第7条 本会の会員は、住所・氏名等に変更が生じる場合、速やかに届け出るものとする。

第2章 運営・組織

(総会)

第8条 本会は毎年1回総会を開くこととし、次の事項を行う。開催時期は別に定める。

① 運営・事業・会計および会計監査報告

② 役員を選出および承認
③ その他必要な事項

(役員および組織)

第9条 本会は、次の役員により組織する。

① 会長 1名 ② 副会長 3名 ③ 理事 若干名 ④ 幹事 若干名
⑤ 会計監査 2名

⑥ その他必要と認められる役員

2 本会の役員は、役員の職務は次の通りとする。

① 会長は、本会を代表する責任者として会務を総理し、必要に応じて総会・理事会等を招集することができる。

② 副会長は、会長が諸般の事情により職務を遂行できない場合にこれを代行する。

③ 理事は、総会の開催および諸事業の執行、会員の管理、通信連絡等の任に当たる。

④ 会計監査は、年1回以上の会計監査を行う。

⑤ 幹事は、理事会の要請により本会運営の補佐に当たる。

3 理事会は、会長・副会長・理事をもって構成する。理事会を年1回以上開き、本会の運営・企画・財務の管理および会員と役員提出議案の審議・決定を行う。

4 役員の選任方法は、次の通りとする。

① 会長および理事は、総会において定める。

② 副会長は、会長の指名により定める。

③ 幹事は、理事会において選任する。

④ 会計監査は、総会において会員中より2名を選任する。

5 本会役員の任期は1期2箇年とし、再任を妨げない。

第3章 付則

第10条 本会会則の改定は、理事会においてこれを審議し、総会の承認を行うものとする。

第11条 本会の運営および諸事業にかかる諸経費は、これを有料にすることができる。

第12条 本会会則は、制定・改定日から施行される。

編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。
URLは下記の通りです。

○近況通信を随時募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数制限は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へご連絡下さい。なお、お電話での依頼は、聞き違い等の可能性がございますので、恐れ入りますがご遠慮いただきたく存じます。

〈編集後記〉

幾度かの脱皮をへて、同窓会も変わりつつある。『会報』も通号七九。伝統の重さが伝わる。変容しつつも、変化しない「形」を伝えたいと。新生同窓会誌二号をお届けできたこと、編集に携わった一同うれしく思っております。



写真
三号館の外観

史学科同窓会ホームページURL

<http://www.nu-hist-d.jp>